

## 市民の足 = 地域公共交通

選挙後最初の6月議会、末松市長は「施政方針」の中で地域公共交通について、「本市にふさわしい移動手段のあり方を検証しなければならない時期にきています」「公共交通網全体の利便性向上に向けて検討し、総合的な公共交通体系の構築」をめざすと述べました。

また市長は、新聞のインタビューでも「各地域を細かく循環するバスと、市の根幹を走るバスの二つのシステムを組み合わせた公共交通を確立させたい」と答え、高齢者をはじめ多くの市民が望んでいる「市民の足 = 地域公共交通」の実現への意欲を明らかにしています。

### 第3期末松市政が実行すべき大きな課題として

6月21日の市議会本会議一般質問で、私はこの公共交通の進め方、「実証運行」について提言しました。これから市が行なおうという「実証運行」は、

市民も市外から来た人も、誰もが利用できるものであること。「駅やバス停から1キロ以上」が「交通空白地域」という捉え方では、市民のニーズと全然合わない。鈴鹿のような町は「移動制約者」が市内全域に存在すると考えるべきだ。実証運行 = お試し期間の段階から「有料で」という考え方に縛られては、柔軟な発想での実験はできなくなる。模索しながら進もうというのなら、まずカネの話は横に置いてスタートするべきだ。

「地域みずからが主体となり、交通手段を確保する」という前提にムリがある。地域住民に費用の分担までさせるような方式は、まず入り口でストップしてしまう。費用は行政が持つのが基本である。

市は今年度、自由に意見を出し合う会議で公共交通の方向性を考え、来年度に実証運行をという予定です。



6月21日、本会議での一般質問

# 市営住宅の定期的な点検と補修を



市営岡田団地・現在142世帯が暮らす

この写真は市営岡田団地です。4階建て9棟、1974年に建設、築45年で老朽化が目立ちます。外壁の塗装が経年劣化、窓やベランダの手すりが赤く錆びている状態です。住民から修繕の要望が出ていますが、なかなか手が付けられていません。この6月補正予算に市営住宅の修繕費3000万円が計上されましたが、21日

の本会議・26日の産業建設委員会でその内容を聞きました。

## 「長寿命化工事」を行なう団地・行わない団地

鈴鹿市の市営住宅団地は16カ所ありますが、その多くが築30年以上で、老朽化が進みつつあります。市は10年ほど前に「長寿命化計画」を立て、今後もしっかり管理するために長寿命化工事を行なう団地と、行なわない団地に分類しました。岡田団地は「行なわない」方になり、管理も「長寿命化・維持保全・用途廃止」の3ランクのうち「維持保全」とされています。最近では新規の入居募集を停止していて空き家も多く、全216戸のうち142戸が住んでいる状態です。

私は、長寿命化工事をせず「維持保全」していると言うが、今も多くの住民が暮らしているのだから、市は「家主」として「健康で文化的な」住居を保障する責任がある。「古いながらも手入れがされている」状態にすべきだと、早期の修繕を求めました。

担当課の説明では、補正予算の3000万円は、岡田・安塚・一ノ宮の3団地を、まず1棟ずつ補修してみて、翌年から全体の補修に必要な予算を立てて5年ほどで進める、その1年目だということでした。私は、住人がいる限りはきちんと管理や修繕をしてほしい、また内部についても各戸の要望など聞いて必要な補修を行なうよう求めました。

市はこれからの方向として、住宅長寿命化計画と住生活基本計画を本年度に見直して、改定する。また、本市人口の減少傾向が続いており、管理戸数の増加につながる新たな市営住宅の建設や建替えは行なわないこと、用途廃止する団地の跡地再生を図っていくとのことでした。

# 上水道住吉配水池更新工事に、 一般会計から8億円を支援

上水道事業は「独立採算」を原則としていて、これまで基本的に一般会計から財政的な支援はありませんでしたが、6月補正予算に「上水道安全対策事業出資金」として約3億円が計上されました。

これは鈴鹿市上水道の基幹的な配水施設である住吉配水池の更新事業に4分の1の支援をする予算の本年度分で、完成までの全体事業費は約32億円、一般会計からの支援総額は8億円になる計算です。

## 上水道会計に財政的「余裕」ができるのでは？

水道料金値上げを議論した2017年12月議会を思い出します。12.5%値上げ案の説明は「今後10年間で予想される赤字17億円+資金繰りに15億円」でしたが、共産党市議団は「本当に必要な値上げは、赤字17億円を解消するための6~7%に抑えるべき、資金繰りは一般会計からの応援で」と反対しました。今回の一般会計からの支援は画期的なことですが、8億円の繰り入れは「赤字要因」が半減したことにもなり、財政的には「余裕」が生まれます。水道料金値上げ時点に戻って、考え直すことが出来るのでは？という点を今後、議論していこうと思います。

---

## 小中学校のICT化整備に27.5億円

他市に大きく遅れていた鈴鹿市の教育ICT化が、やっと大きく進みます。6月補正予算に「教育情報化推進費」関連費用が計上され、今年度中に各種機器が整備されます。導入される予定の機器は、以下のとおりです。

教職員用パソコン 1300台      児童生徒用パソコン 3200台  
大型提示装置 950台      実物投影機 680台

この機器を利用した「授業でのICT活用」「校務でのICT活用」は、来年度からのスタートとなります。特に、市役所では当たり前の「パソコン1人1台」が学校現場ではほとんど無く、先生たちが困っていた問題が解決されます。また学校ごとにバラバラだった校務作業が「統合公務支援システム」導入で合理的に進むようになり、教職員の負担が軽くなります。先生が子どもと向き合う時間がしっかり取れるような改善が期待されます。

## ずいそう



# “ Long Goodbye ”

日本では以前は「痴呆症」と言ったが、今は「認知症」と言う。アメリカでは、少しずつ記憶を失くして、ゆっくりゆっくり遠ざかっていく様子から、「Long Goodbye=長いお別れ」と言う。この病気をいちばん的確な言葉で表現している言葉だと思う。「認知症」という言い方には、そうなったらもうお終いだとか、家族や社会の迷惑だというニュアンスが感じられる。

いま中島京子の小説「長いお別れ」が映画になって、評判である。主人公の元校長が7年間かかって、妻や2人の娘とその家族を巻き込みながら、だんだんみんなと「お別れ」していく過程を、楽しく描いている。介護の日々は大変なことも多くあるが、それよりも面白いことや新しい発見があって、周囲の人たちを明るくすることも多い。

## 「認知症」は不孝ではなく、楽しい「長いお別れ」

私の父親もちょうど主人公と同じく7年間、徐々に認知症が進行して14年前に80才で亡くなった。映画に出てくる元校長の妙な行動や、家族とのトンチンカンな会話は、まるで当時のわが家とそっくりで笑ってしまった。豆腐かチーズと思い込んで石鹸をかじっていたり、娘（孫）の結婚式に神前のお神酒で「カンパーイ」と音頭を取ったり、遊びに来たひ孫をもう大人になっている孫と思い込んだり、市役所からの電話にハイハイといい返事をし、私に伝えることを（必ず）忘れていたり・・・家族の方も、自分が当番の時に「おむつの中にうんこが無い」ことを祈ったり、デイサービス先で便が出るように下剤を調整したり、選挙の投票に連れて行ったが書く名前（自分の息子）が分からず帰ってきたり、いろいろ面白い経験をさせてもらった。

認知症と言っても何もかも忘れているのではなく、町内を散歩して「ここは誰の家？」と聞くと、古い昔からの家はよく憶えているが、新築や増築の家は分からない。デイサービスのお迎えが若い娘さんだとスタスタ行くが、高齢の元婦長さんが手を引いても歩こうとせず、困らせていた。亡くなる前に入院した病院では、車イスで移動していたら、ドア前の張り紙の字を「進入禁止！」と読んだので驚いた。最後まで多くの思い出を残してもらったが、本当に「Long Goodbye」とは、うまく言ったもんだと感心する。